

2024年12月 文京区立森鷗外記念館編集・発行(年4回発行)

ROG  
ART

# 文京区立 森鷗外記念館NEWS

## No.49



### 目次

巻頭コラム「疾走する先導者・山崎一穎先生」須田喜代次(森鷗外記念会会長、大妻女子大学名誉教授)／**展示報告**／**展示のお知らせ**  
コレクション展「鷗外の妹・喜美子の家族―森家と小金井家―」  
／**展示会場から**／**コラム**「観潮楼歌会を想う」石川美南(歌人)／**コラム**「よい短歌の生まれるところ」佐佐木定綱(歌人)／**活動報告**／**カフェ便り**／**ショップ便り**／**これからの催しもの**／**編集後記**

# 疾走する先導者・山崎一穎先生

須田喜代次（森鷗外記念会会長、大妻女子大学名誉教授）

二〇一三年一月発行の『文京区立森鷗外記念館NEWS』No.1の表紙には、前年二〇二二年十一月一日に行われた文京区立森鷗外記念館開館式典時の写真が使用されている。そこには加賀乙彦名誉館長、成澤廣修文京区長、宮崎文雄文京区議会議員、森憲二森鷗外記念会常任理事と共に、テープカットに臨む山崎一穎森鷗外記念会会長の姿がある（肩書はいずれも当時のもの）。二〇二四年現在から、十二年前と同一になる。

同『NEWS』を開くと、開館前日の十月三十一日には、津和野町・北九州市・文京区の三首長による「鷗外サミット」と称されたシンポジウムが開催され、山崎先生はそのコーディネーターとして参加されたことを確認できる。会後、初公開となった展示室での内覧会において、参加者に熱心に解説する先生の姿も写真に残る。開館同日から始まった展覧会は、文京区立森鷗外記念館として最初の特別展であり、「150年目の鷗外——観潮楼からはじまる」と題された同展の監修者こそ山崎一穎先生だった。さらに開館二日後の十一月三日には、これも本記念館初めての特別展関連講演会が開かれ、ここでも先生は講演者として登場し、「鷗外——その歴史小説誕生の劇」という講演をなさっている。

すなわち本記念館スタートの時点から、正確に言えばその準備段階から、山崎先生は精力的に館の企画・運営に関わってこられたのだ。別掲「特別展一覽」を御覧になれば一目瞭然だが、開館以降も毎年のように監修者として各展覧会に先生は参加され、それは本年四月から六月にかけて開催された「教壇に立った鷗外先生」にまで及ぶ。館では年一回の特別展の他に、やはり年二回コレクション展が開催されているのだが、監修者としてお名前は出ないけれども、そのほとんどに実質的な監修をなされてきた。わたくしも展覧会開催前日に、展覧会場で最後のチェックをする先生の姿を何度か目撃している。まさに自ら先頭に立って、記念館という大きな車を先導してきた。「自強不息」（自ら勉強して休息しないこと）『大漢和辞典』という、鷗外が残した言葉を実践したような方だった。

その大きな支えを永遠に失ってしまった喪失感と寂寥はとても言葉に表せない。後進のわたくしどもは、先生が自らの言動で示してくださった学問的姿勢をしっかり継承し、発展させていかなばならない。先生の学恩に深く感謝し、心からの哀悼の意を捧げます。ありがとうございました。

合掌



講演会「鷗外——その歴史小説誕生の劇」での山崎一穎先生 2012年11月3日撮影

去る二〇二四年九月十四日、森鷗外記念会顧問、跡見学園女子大学名誉教授の山崎一穎先生が八十五歳で逝去されました。二〇二二年の開館から、当館の展覧会の多くを監修いただきました。生前の当館へのご功績を偲び、謹んでご冥福をお祈りいたします。

## ●山崎一穎先生監修の特別展一覽

- 二〇二二（平成二十四）年度  
開館記念「150年目の鷗外——観潮楼からはじまる」
- 二〇二三（平成二十五）年度  
「鷗外の見た風景／東京方眼図を歩く」
- 二〇二五（平成二十七）年度  
「谷根千／寄り道／文学散歩」
- 二〇二七（平成二十九）年度  
「鷗外の庭」に咲く草花——牧野富太郎の植物図とともに——
- 開館五周年記念「明治文壇観測——鷗外と慶応三年生まれの文人たち」
- 二〇一八（平成三十年）年度  
「鷗外と旅する日本」
- 二〇一九（令和一）年度  
「鷗外の『うた日記』——詩歌にうたった日々を編む」※詩歌監修は岡井隆氏
- 二〇二〇（令和二）年度  
「二葉、晶子、らいてう——鷗外と女性文学者たち」
- 二〇二二（令和四）年度  
「観潮楼の逸品——鷗外に愛されたものたち」
- 鷗外生誕一六〇年！没後一〇〇年記念  
「写真の中の鷗外 人生を刻む顔」
- 二〇二三（令和五）年度  
「鷗外の食——江原純子氏との共同監修  
「千駄木の鷗外と漱石  
——二人の交流と作品を歩く」  
※中島國彦氏との共同監修
- 二〇二四（令和六）年度  
「教壇に立った鷗外先生」



特別展「千駄木の鷗外と漱石」(2023年10月7日～2024年1月14日)チラシ  
開館記念展「150年目の鷗外」(2012年11月1日～2013年1月20日)チラシ

## 展示報告

特別展

### 「111枚のはがきの世界——伝えた思い、伝わる魅力」

2024年10月12日(土)～2025年1月13日(月・祝)

「111枚のはがき」とは、2023年に茶の湯江戸千家十世家元の川上宗雪氏よりご寄贈いただいた新収蔵の葉書コレクションのことです。本展では、約40年をかけて蒐集されたという貴重な葉書群の全貌を伝えるために一挙展覧しました。

「111枚のはがき」の特徴は、明治から昭和までの文学者、美術家、ジャーナリストなど、さまざまな分野の著名人が関わったものであるという点です。差出人は鷗外を含めて89名、古いものは明治23年から、新しいものは昭和51年まで86年にわたります。作品成立の経緯や歴史を映し出すような重要な葉書もあれば、私信ならではの素顔がみえる微笑ましい内容のものなど、多種多様な魅力を持つコレクションです。ま

た、本展調査の結果、111枚のうち全集や書簡集等に未収録の葉書が30枚以上含まれていることも確認できました。

展示室では、明治(17枚)、大正(25枚)、昭和(69枚)と時代別に展覧しました。時代順にたどると、各時代を象徴する人物や世代交代のありようをみる事ができました。また、明治20年代から30年代前半の葉書の消印が漢数字であること、郵便番号は本展では昭和51年の葉書にのみ見られることなど、葉書の変化を通して郵便の歴史に触れられるのも興味深いことでした。直筆の葉書からは温もりや個性が滲み出ています。大胆な筆跡や細かな文字、絵が添えられたものなど、一枚一枚の魅力を直接ご覧いただけるように展示方法も工夫しました。

【鷗外全集】未収録の鷗外筆嶋田青峰宛葉書(大正5年11月20日)。「大逆事件」検挙直前の幸徳秋水筆葉書(明治43年4月22日)。衰えない探究心が見える南方熊楠葉書(昭和16年4月8日)。會津八一、香月泰男、川端龍子、坂本繁二郎、竹内栖鳳など、画家たちの絵が際立つ、作品とも言える葉書。坪内逍遙、夏目漱石、西田幾多郎、堀辰雄、前田青邨らの筆運びや言葉づかいから、気取らない間柄を想像できる葉書。差出人の人物、受取人との関係性など、111枚の魅力は語りつくせません。本展では111枚を通していただきましたが、今後、一枚一枚の調査が進むことで、「111枚のはがき」の世界がいつそう広がっていくことを願っております。

【展覧会図録販売中】  
111枚のはがき全ての図版(表裏)・翻刻・差出人と受取人の略歴、本文の語注、解説あり。  
A4判136頁(全頁カラー)  
税込1600円

【後半】「夏目漱石のはがきから」  
日時：11月10日(日)14時～15時30分  
講師：須田喜代次氏  
(大妻女子大学名誉教授、森鷗外記念会会長、本展監修者)

【はがきの世界1】  
日時：11月24日(日)14時～16時15分  
休憩あり

【前半】「芥川龍之介のはがきをめぐる」  
三題断——「六朝書体」・海軍機関学校・小説「河童」(60分)  
講師：伊藤一郎氏(東海大学名誉教授)

【後半】「夏目漱石のはがきから」  
講師：松村茂樹氏(大妻女子大学教授)

【はがきの世界2】  
日時：12月14日(土)14時～16時15分  
休憩あり

【前半】「宮沢賢治『臨終の詩』の謎」  
松本竣介はどこで  
この詩に出会ったのか？(60分)  
講師：杉浦静氏(大妻女子大学名誉教授)

【後半】「翻字作業の裏側で——文字に向きあうということ」(60分)  
講師：出口智之氏(東京大学准教授)



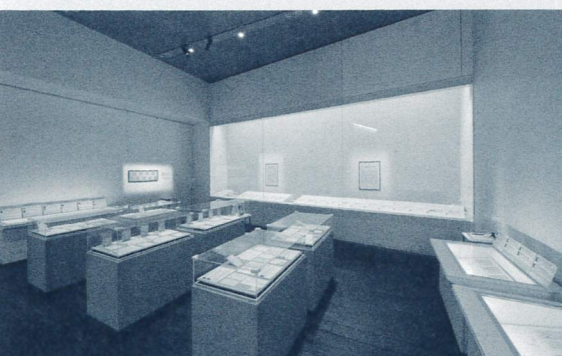
導入展示室 展覧会イメージのタペストリーはフォトスポットに。



第一展示室 明治、大正、昭和と時代別に展覧。



第一展示室 はがきの表裏を鑑賞できるよう立体的に展示した。



第二展示室 一面にひろがる昭和のはがき。

展示のお知らせ

コレクション展

「鷗外の妹・喜美子の家族  
森家と小金井家」

コレクショ展



小金井喜美子『泡沫千首』(表紙・部分) 私家版 昭和15年  
70歳の時に出版した歌文集。  
与謝野晶子が序歌序文を手がけた。



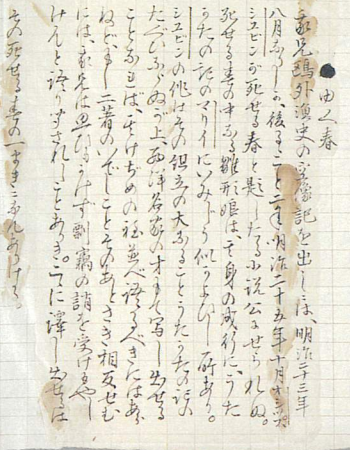
父静男の一周忌記念 明治30年  
観潮樓の玄関前にて。  
後列左より、次女を抱く喜美子、鷗外、3人おいて、喜美子の夫・小金井良精。



喜美子24、5歳頃 明治26、7年 個人蔵

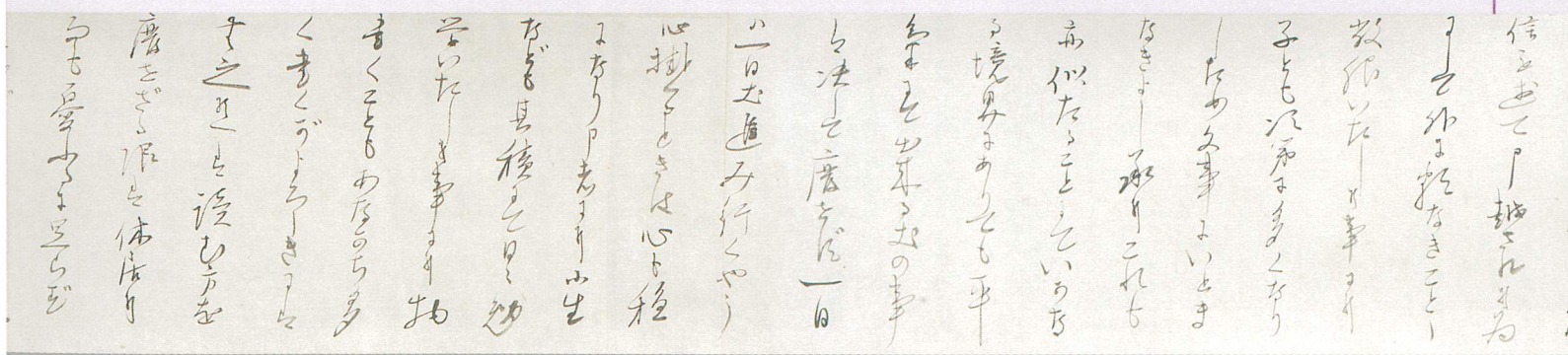
小金井喜美子(明治3〜昭和31)は、森家4人きょうだいの第三子として現在の島根県津和野町に生まれました。東京女子師範学校附属高等女学校(現・お茶の水女子大学附属高等学校)に学んだ後、九州文学の日本語訳を手がけ、随筆や小説、和歌を創作し、明治の女性文学者として評価されてきました。  
女学校卒業を前に喜美子は、解剖学者で人類学者である小金井良精(安政5〜昭和19)と結婚しました。良精は長兄・鷗外の大学の先輩、また次兄・篤次郎の解剖学の教授であったという縁が喜美子の人生に小金井家という新しい世界をもたらしたといえます。結婚後は森家と小金井家を頻りに行き来し、二つの家族の交流の要となりました。そうした中で鷗外は、兄として喜美子の学業と執筆を応援し、また結婚後には文学の世界における先輩として、家庭生活と文学活動の両立に悩む喜美子を見守り助言を与えるなど支え続けました。

本展では、喜美子を中心とした森家と小金井家の親交の様子を、喜美子の著作や鷗外から家族の日記や書簡などの館蔵資料により紹介します。



小金井喜美子 自筆原稿『ゆく春』(部分) 明治31年頃  
鷗外の勧めでオーストリアの作家シューピンの小説を翻訳したもので。

会期 ● 2025年 1月18日(土)〜4月6日(日)  
[会期中の休館日] 1月27日(月)・28日(火)、2月25日(火)・27日(木)、3月24日(月)・25日(火)  
会場 ● 文京区立森鷗外記念館 展示室2  
開館時間 ● 10時〜18時(最終入館は17時30分)  
観覧料 ● 一般300円(20名以上の団体・240円)  
※中学生以下無料 障害者手帳ご提示の方と介護者1名まで無料  
※文京ふるさと歴史館入館券、パンフレット(冊子)、友の会会員証ご提示で2割引き  
※その他各種割引がございます。詳細は記念館HPをご覧ください。



鷗外筆 喜美子宛書簡(部分) 明治33年12月29日 赴任先の小倉(現・福岡県北九州市)から、「一日ハ一日丈進み行くやう心掛くるときは心も穏になり」と妹を励ます手紙。

関連事業のお知らせ

展覧会期間中に関連講演会を予定しております。申込方法は8頁をご覧ください。  
講演会  
「小金井喜美子の歌世界」  
森家のうちで鷗外に最も近い資質を備えて生まれた喜美子の女性像に接し、その個性豊かな詩歌を鑑賞します。

講師 今野寿美氏  
(歌人・宮中歌会始選者)  
日時 3月8日(土) 14時〜15時30分  
会場 文京区立森鷗外記念館 2階講座室  
定員 50名(事前申込制)  
料金 無料(参加費と本展観覧券)  
申込締切 2月19日(水) 必着

ギャラリートーク

展示室にて当館学芸員が展示解説を行います。申込不要、当日の展示観覧券が必要です。

日時 2月12日(水)、3月12日(水)  
いずれも14時〜(約30分)

同時開催

コレクション展期間中に、左記コーナー展示を開催します(展示室)。展示観覧券で、コレクション展と共にご覧いただけます。

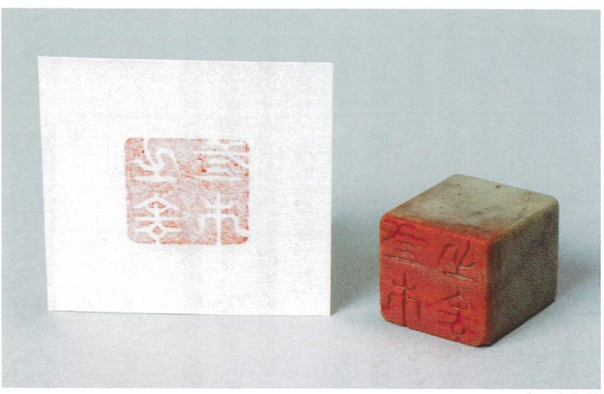
「鷗外の弟・篤次郎と潤三郎」  
展示期間 1月18日(土)〜4月6日(日)の開館日

展示会場から

印「式木之舎」

明治12(1879)年頃(推定) [100134]

鷗外は生涯でおよそ45顆の印章を使用したとされ、内16顆を当館が所蔵しています。中でも最も古い印章が「式木之舎」です。縦22mm、横24mm、高さ28mmの石製で、苗字の「森」を三つの木(式木)に置き換え、戯作者風の戯写「式木之舎」と付けたようです。この蔵書印は学生時代の鷗外が5歳下の弟・篤次郎と集めた書籍に捺すために手作りしたとされ、鷗外の旧蔵書にその印影を見ることが出来ます。  
幼い頃から「其性質ははきはきして成績も勝れ」(小金井喜美子『次ぎの兄』)ていた篤次郎に、鷗外も信頼を置いていました。鷗外と同じ東京大学医学部に進学し、鷗外と共に学生時代から執筆活動を始め、やがて内科医でありながら劇評家としても名を馳せました。この時、篤次郎は「式木之舎」を引き継いだような筆名「三木竹二」を用いました。29歳で診療所を開業、33歳で演劇総合雑誌『歌舞伎』を創刊するなど、医師、劇評家として活躍していました。この素朴な「式木之舎」の印には、鷗外と志半ばに世を去った篤次郎の少年時代の思い出が刻まれているのです。  
本資料はコーナー展示「鷗外の弟・篤次郎と潤三郎」でご覧いただけます。



印面と印影



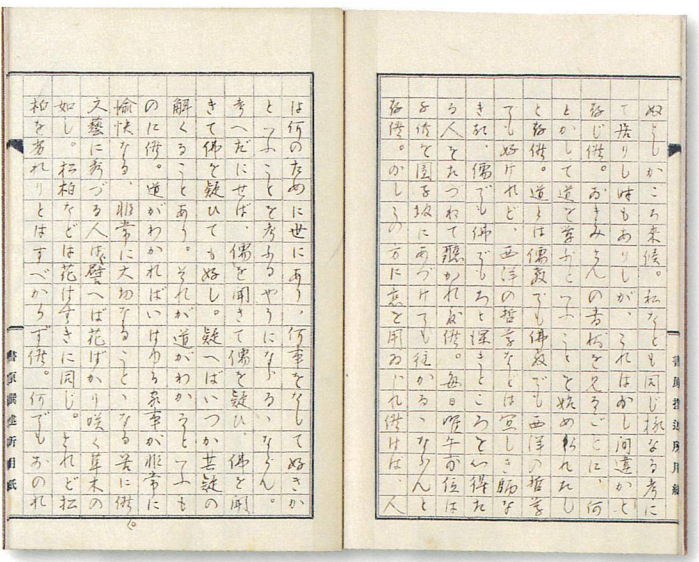
側面に彫りかけの「森」の字が見える

【参考図版】『近世名家小品文鈔』(土屋栄、明治10年)に捺された「式木之舎」。上部の印影「橋井堂」は父・静男の医院の名(東京大学総合図書館蔵)

小金井喜美子 自筆原稿『兄の手紙』

[100158]

本資料は、小金井喜美子が70代となり、かつて兄・鷗外から貰った手紙をひもときながら当時を回想するものです。  
鷗外が小倉に赴任した明治32年、東京にいる妹・喜美子は小金井良精との間に第四子となる次男を出産。慌ただしい毎日に、読書や文学作品の執筆などまなまならなかったことは容易に想像できます。喜美子は当時を振り返り、「ただ兄に手紙を書くということが、私の慰安なのでした」と書きます。鷗外はそうした妹の心中を慮り、受け止めるだけではなく積極的に提案もしました。母・峰子宛書簡において、喜美子に言及して「何とかして道々を学ぶといふことを始められた」と存候と書き、自分の経験を引き合いに、悩みや迷いの絶えない中を生きる妹へのアドバイスをしています。「お兄い様」と慕う鷗外から、彼女が生活・文学活動の両面において多くを学んだ様子がうかがわれます。  
『兄の手紙』は、『兄鷗外の手紙 未発表書簡三通』として雑誌『文芸』(昭和23年4月)に発表。その後『鷗外の思ひ出』(八木書店 昭和31年)に収録されますが、喜美子は刊行を見届けることなく死去し、同書は遺作となりました。  
原稿用紙14枚に丁寧な筆遣いで書かれた本資料は、コレクション展「鷗外の妹・喜美子の家族」森家と小金井家」でご覧いただけます。



上: 小金井喜美子 自筆原稿『兄の手紙』(部分)  
下: 小金井喜美子『鷗外の思ひ出』八木書店、昭和31年1月 成28年

主な参考文献

森鷗外記念会編『鷗外印譜』昭和63年/文京区立森鷗外記念本郷図書館編『鷗外愛用の品々 所蔵資料図録第2集』手回品・生前記念品・家藏品ほか/文京区教育委員会、平成16年

主な参考文献

森鷗外記念会編『鷗外印譜』昭和63年/文京区立森鷗外記念本郷図書館編『鷗外愛用の品々 所蔵資料図録第2集』手回品・生前記念品・家藏品ほか/文京区教育委員会、平成16年

# コラム 観潮楼歌会を想う

石川美南 (歌人)

9月29日(日)、新・観潮楼歌会「対決！観潮楼歌会に集うスター達」に出演した。佐佐木定綱さんと私が観潮楼歌会について簡単に解説した後、そこに集った歌人たちの歌同士を戦わせる対戦型のイベントだ。大銀杏の見える二階の講座室は、まさかかつて歌会が開かれた場所に位置しており、大変心が躍った。

そもそも、観潮楼歌会とは何か。森鷗外が1907(明治40)年から1910(明治43)年にかけて自宅(「観潮楼」)で催していた歌会のことである。鷗外は日露戦争から帰還した後、明星派の与謝野鉄幹、平野萬里、吉井勇、北原白秋、石川啄木、根岸短歌会の伊藤左千夫、古泉千樫、斎藤茂吉、竹柏会の佐佐木信綱などを招き、豪華な夕食を振る舞いながら短歌について議論を交わした。現在、歌会的全記録は残っていないが、断片的に残る記録や参加者の日記などを見る限り、最盛期は大いに盛り上がりつつあった。

流派が異なり、かつ一癖も二癖もある歌人たちは互いに折り合うことなく、歌会は次第に参加者が減って尻すぼみに終わってしまった。しかし、参加者の一人である斎藤茂吉は後に、「(前略)銘々で勝手な作風の歌を作つてみたものであるが、それは表面で、潜流としてはもつと働きかけるものがあつたと考ふべきである」と率直に書いている(「森鷗外と伊藤左千夫」)。明星を率いていた与謝野鉄幹の方は、「口が裂けても働かせるものがあつた」なんて言わなそうだけれど、やはり、左千夫らと真剣にやり合ったことが実作にも影響したのではないか。その後の彼らの作品に歌会の痕跡を探ってみるのも、後世に生きる私たちの密かな楽しみと言えるかもしれない。

それにしても、隆盛を極めた明星派が分裂し始める一方、根岸短歌会が力を持ち始めていた短歌史上の転換期にあつて、これだけのメンバーをひとところに集めることができた鷗外の人間力は、すごい。鷗外のバランス感覚がわかると同時に、短歌というジャンルに新たな可能性を見出し、真剣に向き合おうとしていた気配が伝わってきて、大変興味深い。鷗外自身の観潮楼歌会以降の成果は『我百首』として結実する(『沙羅の木』収録)。そこには、明星派の影響を受けつつ、独自の作風を模索していた鷗外の短歌愛が表れているように思われる。

## 活動報告

学芸員による

子ども向けギャラリートーク開催



8月25日、毎年夏季に実施している子ども向けギャラリートークを開催しました。当館では、中学生以下の方は無料で展示を観覧いただけると共に、展示室常設コーナーを見学しながら解答するワークシートを配布しています。当日は展示室だけでなく庭園の史跡を巡り、ワークシートを手に、鷗外の生涯を辿りました。子どもだけの参加はもちろん、未就学のお子様連れでも参加できるイベントです。実施の際はお気軽にご参加ください。



朗読会『阿部一族』を読む「開催

コレクシオン 展「鷗外の意地」のはなし——歴史小説『阿部一族』を中心に開催にあわせ、8月31日に朗読会を開催しました。ご出演は相模女子大学や早稲田大学で非常

イベント当日のようす

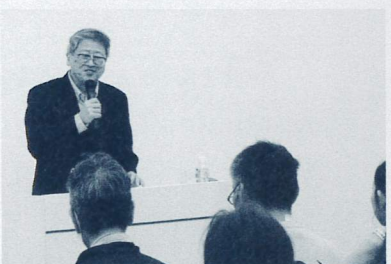


石川美南 いしかわ・みな

1980年生まれ。同人誌poolおよび[sai]の他、さまざまの歌人の会、山羊の木などでぼつぼつ活動中。歌集に『砂の降る教室』『裏島』『離れ島』『架空線』『体内飛行』。2020年、第1回塚本邦雄賞受賞。最近の趣味は「しなかつた話」の蒐集。

勤講師もされている朗読家の内木明子氏。『阿部一族』本編より抜粋し朗読いただきました。作品を耳で聴くことで、殉死者それぞれの立場、阿部一族が置かれた悲劇的状況や心情がよく伝わります。討ち入りの場面では抑揚のある発声で、戦いの臨場感や迫力が感じられました。大変好評で、再演を望む声が多くありました。

開館記念講演会を開催しました



11月3日の文化の日に、国文学者で電気通信大学名誉教授の島内景二氏をお招きし、「森鷗外と源氏物語」と題してご講演いただきました。島内氏はNHKラジオ「古典講読 名場面をつづる『源氏物語』」に解説者として今年度一年出演されています。鷗外作品、特にドイツ三部作や「即興詩人」において、「源氏詞」(「源氏物語」に見られる特徴的な言葉)が多く用いられていることを詳細な資料で具体的に示すと共に、『源氏物語』から受けた影響が後年の歴史小説や史伝にまで及んでいるというお話しをされました。また、鷗外が妹・喜美子に、『源氏物語』の注釈書である北村季吟の『湖月抄』を贈ったエピソードなども紹介いただきました。折しも『源氏物語』をテーマにしたNHK大河ドラマ「光る君へ」が放送され、『源氏物語』への関心が高まっていることもあり、参加の皆さんは熱心に聞き入っていました。

# コラム よい短歌の生まれるところ

佐佐木定綱 (歌人)

「よい短歌」とはなにか。これは古くから歌人の喉元に突き付けられている永遠のテーマだ。1907(明治40)年頃、森鷗外や佐佐木信綱、与謝野鉄幹などの歌人が集まり、観潮楼歌会という歌会が開かれていた。

この歌会の特色は、派閥を越えた歌人たちが、さらには画家や詩人、小説家など垣根を超えた人々が参加していたことだろう。発端には、派閥で分断されている歌壇の橋渡しになれば……という鷗外の思いがあつた。つまり、越境の先によい短歌があるというわけだ。と言いつつも現実には派閥争いが盛んだったようだ。歌会はその歌に票を投じて、得票を決める。作品は無記名ではあるが、なんとなく作者はわかってしまうもので、仲間を集めて点取合戦を有利にしていたというのだ。点を取ればよい歌になるわけでもないのに……みつともない……。

さて、そんな大先輩たちのかわいらしさを感じつつ、石川美南さんともに「新・観潮楼歌会」対決！観潮楼歌会に集うスター達」というイベントを行った。単純に紹介するだけでは味気ないので、歌をそれぞれ上げ、良さをプレゼンし、会場の方々に良いと思った歌を選んでもらう「歌合せ」という形式にした。勝敗を判定してもらうことで、双方向に歌を味わう試みである。

一番面白かったのはこの作品。なんと二人の選が同じになった歌であつた。爪を嵌む。「何の曲をか弾き給ふ。」「あらず汝が目を引き掻かむとす。」 森鷗外 「琴を弾くための爪をはめているので、「何の曲を弾いて下さるのですか？」と聞くと、「いや、あなたの目を引っ掻こうと思つているんです」と答えられた」という内容の歌。まあ恐ろしい。石川さんが先攻、口語や舞姫との類似を指摘。私は後攻、初句切れや光を奪うことの復讐心などを指摘。ふたりとも「舞姫」を連想したのが面白い。そして判定。この企画、勝ち負けはおまけ程度に思つていたのだが、いざ判定となると鼓動が早くなり、鼻息は荒くなるのだった。

絶対負けたくない。頼むから勝たせてくれ！負けるとしても僅差で負けてくれ！ああ、もう見たくない！などと、頭に血が上つていくのを感じながら、ふと当時の彼らもこんな感じだったのかなあと気づいた。よい短歌がなにかという問いに答えるのは難しいが、よい短歌が生まれる場所、というものは少しわかった気がする。100年以上前の彼らは派閥争いをしながらも、切磋琢磨し、意見をぶつけ合い、エネルギーの渦巻く場で、体験として歌を楽しんでいたのだ。



佐佐木定綱 1986年、東京都生まれ。「心の花」所属。2016年、第62回角川短歌賞受賞。2020年、第一歌集『月を食う』で第64回現代歌人協会賞受賞。2022年度「NHK短歌」選者。神奈川新聞歌壇選者。



カフェ便り

特別展「100枚のはがきの世界」では、文学者や美術家、ジャーナリストなど様々な分野の人がやり取りしたはがきが展示されています。特別展会期中、モリキネカフェでは展示資料の印象をもとに、様々な素材を使用したオリジナルのパフェを販売しています。黒蜜、きなこ風味のコーンフレーク、生クリーム、果物、白玉、アイスクリームが層になり、ポイントにひげをかたどった羊羹を添えて、「モリキネパフェ」の完成です。見た目、味ともにお楽しみいただけます。一枚一枚に広がるはがきの世界を楽しんだ後は、カフェでグラスの中の世界も堪能ください。特別展開幕の1月13日まで限定メニューです。お早めにお試しください。



ドリンク付 税込1,000円

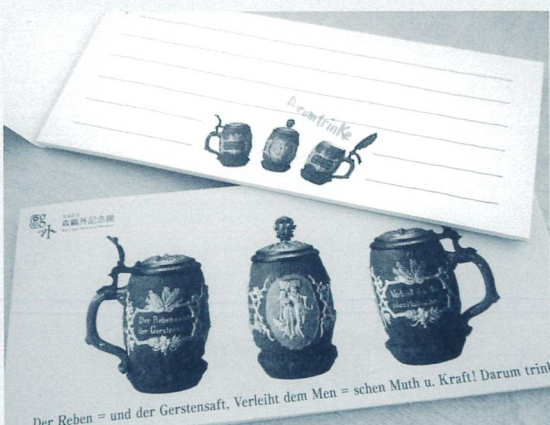
11月15・16日、文京シビックセンターで行われたスカイビューラウンジバーに参加しました。2019年度のコレクション展「文学とビール」期間中に限定販売していたオリジナルのクラフトビール「モリキネビール」が缶で復活(2019年は瓶)。高層から眺める夜景がモリキネビールの味を一層引き立てました。



ショップ便り

11月1日より一筆箋に新しいデザインが加わりました。今回のモチーフは展示室でお馴染みのビールジョッキです。このジョッキは森鷗外が留学先のドイツで、24歳の誕生日を迎えた際に記念として贈られたものです。蓋のすずには「W. Roth, d. St. A. Rinano Mori. z. E. 19. Jan. 1886」と刻まれています。ジョッキの胴部には「Der Reben = und der Gerstensaft, Verleht dem Menschen Muth u. Kraft! Darum trinke (W. In)とビールは人に勇気と力を与えてくれる。乾杯しよう」と楽しそうな一文が書かれています。様々な角度の胴部を前面に配置したデザインです。展示室にあるビールジョッキと見比べてみてください。

今回は既存の商品より紙を薄くし軽量化しました。枚数は以前と変わらず30枚です。万年筆も滲まずさらさらと書くことができ、横書きで普段使いにも便利です。



一筆箋 税込400円

# これからの催しもの

催しは◎以外は全て事前申込制です。各申込締切日必着でお申込みください。詳細は、チラシやHPをご覧ください。当館までお問い合わせください。

★応募多数の場合抽選とさせていただきます。  
★悪天候等やむを得ない事情により、日程・講師・内容を変更する場合があります。

1月19日(日) 10:00～17:30  
**鷗外誕生日記念行事 無料開館日◎**  
 1月19日は鷗外の163回目の誕生日です。誕生日を記念して、無料で展覧会を観覧いただけます。

1月19日(日) 14:00～15:30  
**鷗外誕生日記念講演会「鷗外追想」**  
 講師：宗像和重氏(早稲田大学名誉教授)  
 会場：講座室 料金：1000円 定員：50名  
 申込締切：1月6日(月)必着  
 2022年に、鷗外同時代回想集『鷗外追想』をまとめられた宗像和重氏に、鷗外と同時代の文学者や親族らが語る鷗外像についてお話しいただけます。

3月8日(土) 14:00～15:30  
**展示関連講演会「小金井喜美子の歌世界」**  
 講師：今野寿美氏(歌人、宮中歌会始選者)  
 会場：講座室 料金：無料 ※要展示観覧券(半券可)  
 定員：50名 申込締切：2月19日(水)必着  
 森家のうちで鷗外に最も近い資質を備えて生まれた喜美子の女性像に接し、その個性豊かな詩歌を鑑賞します。

1月26日(日)／2月9日(日)／2月23日(日・祝)／3月9日(日)／3月23日(日) 各回 11:00～12:30  
**鷗外講座応用編**  
**「鷗外をとりまく人々——友、師、家族」〈全5回〉**

- 講師：第1～3回：倉本幸弘氏(森鷗外記念会常任理事)  
 第4回：藤木直実氏(日本女子大学非常勤講師、森鷗外記念会理事)  
 第5回：須田喜代次氏(大妻女子大学名誉教授、森鷗外記念会会長)  
 会場：講座室 料金：各回500円 定員：各回50名 ※ご応募は各回ごとをお願いします。
- 【第1回：鷗外の友】1月26日(日)  
 「画家 原田直次郎について—「うたかたの記」に触れながら—」  
 申込締切：1月10日(金)必着
  - 【第2回：鷗外の師】2月9日(日)  
 「東京医学校教師ベルツ博士について—「ベルツの日記」に触れながら—」  
 申込締切：1月24日(金)必着
  - 【第3回：鷗外の家族① 弟】2月23日(日・祝)  
 「弟篤次郎について—欧州滞在中の鷗外へ宛た篤次郎の手紙を紹介しながら—」  
 申込締切：2月7日(金)必着
  - 【第4回：鷗外の家族② 母、妹、妻】3月9日(日)  
 「書く姿、書かれた姿」  
 申込締切：2月21日(金)必着
  - 【第5回：鷗外の家族③ 子どもたち】3月23日(日)  
 「長い、長い、幸福な日々」  
 申込締切：3月7日(金)必着

### ◆◆上記イベントの申込方法◆◆

事前申込制のイベントは、各申込締切日までに下記のいずれかの方法でお申込みください。申込みは、1通につき1名様(はがき・Eメールどちらかお一人様1通まで)、応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。申込締切後1週間以内に抽選結果をお知らせします。

- ①往復はがき 往信に参加希望プログラム名・日程・氏名(ふりがな)・住所・電話番号、返信用には、住所・氏名を明記の上、〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 文京区立森鷗外記念館イベント係までご応募ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号をご記入ください。
- ②Eメール 件名に参加希望プログラム名・日程・本文に氏名(ふりがな)・Eメールアドレス・電話番号を明記の上、bmk-event@moriogai-kinenkan.jp までご応募ください。 ※参加可否のご連絡をEメールでいたします。当館からのEメールが受信可能なEメールアドレスをご記入ください。受信制限が設定されている場合、当館からのEメールを受け取れないことがありますので、あらかじめご確認のうえ送信ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号もしくはEメールアドレスをご記入ください。

[ご提供いただきました個人情報は、個人情報保護法に基づき適切に管理し、当該プログラム以外の使用はいたしません。]

## 編集後記

11月4日、「第10回ふるさとと文学2024 鷗外・漱石・一葉の神保町」(本の街・神保町を元気にする会主催、日本ペンクラブ企画監修)が千代田区の共立講堂で開催され、当館は画像提供等で協力しました。三人の文学者と神保町の結びつきを、映像や語り、演奏で表現したパフォーミング。それぞれの作品朗読や、著名な小説家らによるシンポジウムなど盛りだくさんのプログラムで、会場に集まった多くの皆様に鷗外に関心を持っていただける機会となりました。

12月1日には、東京ビッグサイトで開催された「文学フリマ東京39」に出店しました。「文学フリマ」とは、作り手が「文学と信じるもの」を自ら販売する即売会で、小説、評論、詩歌など様々なジャンルを対象とし、プロ・アマチュア、個人・団体・企業問わず出店が可能です。当館は『森鷗外宛書簡集』やオリジナルグッズを販売。過去最大の会場、出店数だった「東京39」で、館の存在を発信することができました。

11月15、16日の「スカイビューラウンジバー」や、12月19日の「ミュージズフェスタ」と、文京区主催イベントにも参加するなど、文化の秋は館を飛び出している活動が多くありました。

## 交通案内

### ●電車をご利用の場合

- ・東京メトロ千代田線「千駄木」駅 1番出口 徒歩5分
- ・東京メトロ南北線「本駒込」駅 1番出口 徒歩10分
- ・都営三田線「白山」駅 A3番出口 徒歩15分
- ・JR線・京成線「日暮里」駅 西口 徒歩15分

### ●バスをご利用の場合

- ・都バス 草63番系統「千駄木一丁目」下車 徒歩1分
  - ・都バス 上58番系統「団子坂下」下車 徒歩5分
  - ・B-ぐる千駄木・駒込ルート「19特養ホーム千駄木の郷」下車 徒歩5分
- ※一般の駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください

〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 TEL: 03-3824-5511  
 URL: <https://moriogai-kinenkan.jp>

開館時間 10:00～18:00(最終入館は17:30)

休館日 毎月第4月・火曜日(祝日の場合は開館、例外あり)、  
 年末年始(12月29日～1月3日)、及び展示替期間、燻蒸期間等



ogai  
 文京区立  
**森鷗外記念館**  
 Mori Ogai Memorial Museum